

特集

「子どもの体と心の健康」を考える

2002年9月中央教育審議会は、「昭和60年頃から子どもたちの体力が低下しており、……社会全体の活力が失われる事態が危惧される」とし、文科省に「子どもの体力向上のための総合的方策」を答申した。

これを受け、県教委は新潟県体力向上推進委員会を立ち上げ、体力の向上を図るため、2003年度から小中高全てで体力テストを開始した。さらに「体力」を総合的にとらえて、食生活や生活習慣の改善等も視野に入れたからだと心の発達と健康についての指導を強化するとした（『教育情報』74号、2003年7月）。

今かかえている子どもからだとの心状態は、内閣府の調査では子ども（10代）の半数以上が日頃ストレスを感じると回答し、さらに、「自分は孤独であると感じる」と回答した生徒の割合は、日本が29・8%と先進24か国中で飛び抜けて多く、子どもたち

はストレスと孤独感に苛まれている。

一時期、「子どもにうつ病はない」と言われていたが、最近の調査・研究によると、小学生の約8%、中学生の約23%が抑うつ傾向にある。

一方、2012年12月、東京・麻布の小学校給食でアナフィラキシーショックによる5年生女子の死亡事故が発生した。以後、学校給食にあたっての配慮は深刻で、いつどのようなアレルギーの発症が起こるのか危惧され、子どもの成長・発達の問題は喫緊の課題となっている。

そこで、今の子どもからだとの問題を捉えるとき、人類史における子どもの成長・発達の研究成果に学び、今の子どもが発達の過程で、どのような問題に直面しているかを追求し、子どもが自然の中で育つことの大切さも含め、子どもの差し迫った「からだとの健康の問題」を探りたい。